

大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018

展覧会「2018年の〈方丈記私記〉—1丈四方の空間設計とその展開」

企画概要・作品公募要項

応募締切 2017年12月25日(月) 必着

会期 2018年7月29日(日)—9月17日(月・祝)

会場 越後妻有里山現代美術館[キナーレ]回廊

主催 大地の芸術祭実行委員会

[展覧会について]

北川フラム(大地の芸術祭 総合ディレクター)

2018年7月29日～9月17日に開催される「第7回大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018」では、芸術祭の中心的な施設である越後妻有里山現代美術館「キナーレ」にて、展覧会「2018年の〈方丈記私記〉—1丈四方の空間設計とその展開」を開催します。

本展は、十日町市中心市街地エリアにおいて回遊性の強化をはかり、賑わいを創出するために展開することを指す「〈越後妻有方丈村〉百年構想」の「発想の起点」となる展覧会です。

作家・堀田善衛(1918-1998)は、戦中、「方丈記」と出会い、1971年「方丈記私記」を上梓します。戦後の混乱の中、旧来の価値観が根こそぎ崩れ、目指すべき方向もないなかで、藤末鎌初の動乱期を生きた末端貴族である鴨長明(1155-1216)の生き方に倣おうとしたのです。地震、火災、飢饉、といった災害が続くなか、わずかに四畳半(方丈)の庵に起居し、そこから世の中を見、考え、記録した長明は、「紅旗征戎、我が事にあらず」(注1)とうそぶいた藤原定家(1162-1241)につながり、また、江戸の封建制が限界にきているなか、生まれ故郷の近くに帰り、喜捨によって生き、文字通りの五合庵で生活した大愚良寛(1758-1831)に引き継がれていく系譜にあります。彼らのあり方は、市井に生きながら知識人であろうとした堀田にとって唯一の方途であり、堀田は居場所に垂鉛を降ろし、居場所から世間を視ることを自らに課しました。

芸術祭が開催される越後妻有は、信濃川を遡上した人々が上信越の峻険な山にはばまれた、まさに越(化外の地)後(その遠く)のとどのツマリの豪雪地です。そのゆきどまりの地にやってくる人を受け入れ、辛苦の末に地滑り地を棚田に変え、蛇行する川の流れを変え(瀬替)、手掘りのトンネル(マブ)によって日本一の米どころとなり、人口を養った地です。そして、(絹)織物の産地になり、戦時には兵隊の強力な供出地となり、戦後は都市に労働力を送り続けました。しかしオイルショック以降、経済はグローバル化し、農業価値の低下、市場第一主義、効率化がこの地を直撃しました。一方で、20世紀の理念であった都市は、痛み、痛み、生きていく実感の場としてのコミュニティは崩壊しています。

その坂道を転がるなかで、越後妻有では、美術がもつ土地の特徴を発見する力、作品成立の場を外部からのアーティストと居住者が相談し、協働するプロセスの場を経て、他者と関わり、自立的な地域展望をつくり始めたところも出てきました。外来者の「観光」と地域の「感幸」が重なり出したのです。

しかし現在、どんな地域もグローバル経済の影響を受け、政治的建前と生活・経済の実態の落差に呻吟しています。地域という場で健闘してきた越後妻有の美術もまた、空間的、思想的、さらに極東の島国が拓いてきた西洋化の桎梏に悶えています。私たちは、美術が本来もつ祝祭性を活かしながら活動してきましたが、今ここで改めて、現在の世界を覆う均質空間、閉ざされた系のなかでの自縄自縛を反省するべく、また暗黒の中世が工房(アトリエ)、議論(アカデミー)、手工業(マニファクチュア)によって次の時代を用意したこと倣って、それぞれの方丈記を発表する機会をもちたいと思います。

注:「大義名分をもった戦争であろうと(所詮野蛮なことで、芸術を職業とする身の)自分には関係のないことである」という意味。堀田は、戦中、いつ戦争に駆り出されるかわからない不安の中で定家のこの言葉に出合った時の衝撃を、『定家明月記私抄』の冒頭で書いた。

[開催にあたって]

局所性(ローカリズム)と変革の意味

原広司

今日、環境論は、均質空間に対する妄信に、ややブレーキをかけるはたらきを挙げている。半世紀前には、均質空間は、特に、都市の中心部についてみれば、ほとんど不可避的な理念であり、それに対する有効な理念は不在であった。俗に言えば、均質空間は、科学・工学に裏打ちされて、快適であり、便利である。その主張の根底には、第2の自然つまり本来の自然と切り離されたところに、人工的に制御される新しい気候と交通の世界を確立しようとしている意図があり、もし、均質空間について、複数の人々が合議すれば、言い換えれば、任意の委員会が開催されれば、多数決によって、均質空間は、まず否定されることはないと言ってよいだろう。しかし、地球環境の危機の意識は、均質空間の絶対性に、危険信号を送り出したのである。

一方、コンピューターとインターネットは、あっという間に、私たちを、変革の時期に送り込んだ。この新しい事態は、もちろん均質空間は強化すること、すなわちグローバリズムをさらに一層強化すると同時に、交通について、未知の可能性を秘めており、ことによると均質空間からの脱出の予感さえある。

『方丈記』は、まず第一に、局所性にまつわる建築論であり、それは「縮小の美学」と言える。単純には、ローカリズムの探求の物語で、住居を $1/10$ 、 $1/100$ と縮小してゆく過程が、あるべき住居に到達する方法であることを報告している。しかし、それだけだとすれば、『方丈記』が、世界史にあつて稀有の建築論とは言えないだろう。大切なのは、次の報告なのである。つまり、第二に、縮小の過程から、突然、住居ではなく、外界が出現してきたという空間の転換の報告である。

これは、「全てのものに全てがある」とする近代の、ライプニッツの予定調和とは異なった側面をもつ交通論なのだ。いわば、住居に入ると外に出るという仕組み、わかりやすく言ってしまえば、「縮小の美学」は、反転のデバイスの発見なのである。言葉を添えれば、ミクロの世界を注視していったら、マクロの宇宙が見えたとの報告なのである。今日の物理学で言えば、量子を探求していたつもりが、突然宇宙のなりたちが見えてきた、という反転であり、これは、幾何学的な転位なのである。長明は、外界の四季の様相を美しく、かつ深淵に記述している。

『方丈記』は、それ故に、ローカリズムのグローバリズムに対するまたとないお手本であるが、このような相転位の図式は、まず私たちには期待すること自体が無理である。ただ、私たちはまさに、コンピューターが誘起した変革の時代にあつて、『方丈記』のような、コンピューターのような変革についての正しい解釈は可能にも思える。均質空間が人間あるいは集団の、どちらかといえば身体性に依拠して、この優性を誇るのに対して、新しい空間概念は、人間の意識現象に注視することによって、準備されるにちがいないであろう。

補注:

均質空間やライプニッツ的な予定調和論(「モナド」は、「宇宙の鏡*」*宇宙の縮図の意)は、自己相似性に依拠しており、局所性は転位や反転をともなっておらず、部分と全体の同一性を論拠している。数学で言うと、フラクタルの理論のように、普遍であること。従って、矛盾は存在せず「本質」といった概念に近く、時間が欠落し、変化するものすなわち「様相」が消失する。長明や道元は時間、現象に着眼した時代の人たちであり、「変わること」と「変わらないこと」つまり、矛盾を同時に受けとめようとした。

[開催概要]

展覧会名	2018年の〈方丈記私記〉——1丈四方の空間設計とその展開
会場	越後妻有里山現代美術館「キナーレ」回廊 新潟県十日町市本町6丁目
会期	2018年7月29日(日)～9月17日(月・祝) 51日間
審査員	原広司(建築家)、西沢立衛(建築家)、北川フラム(大地の芸術祭 総合ディレクター)
展示内容	建築家、アーティスト等による作品展示(30-40点程度)

展覧会のポイント

●〈越後妻有方丈村〉百年構想

本展は、今後、大地の芸術祭を軸として、十日町市中心市街地で長期にわたって構想される「越後妻有方丈村」の発想の起点となる展覧会です。この構想では、市街地の活性化をめざし、「越後妻有里山現代美術館キナーレ」から今秋開館予定の「越後妻有文化ホール」を範囲としたエリアを対象に、空家・空店舗などの既存建築にさまざまな機能をもった小空間(50-100件程度)を埋め込み、回遊性の強化、多様な人々の参画をはかります。

● 方丈の「村」

本展で展示される作品は、組み立て式、移動式の小建築となります。キナーレ回廊に多様な作品を配置し、仮想の「村」を原寸体験できる展覧会です(実際には、既存建築にあわせて設計しなおします)。

鴨長明のもつ世界観を背景に、建築家、アーティストが創り出すひとつひとつのミニマムな空間は、世界を映しだし、その小さな空間を通して訪れた人々は世界を見るのです。

● 機能性と共同性

それぞれの小建築は、生活とつながったさまざまな機能を持った空間です。想定されるのは、①住居 ②オフィス ③ショップ ④食堂(レストラン、カフェ等) ⑤アトリエ ⑥ギャラリー ⑦その他です。ひとつひとつの空間には、その機能を実現するための具体的なパートナーが関わります。「住む」「働く」「売る・買う」「食べる」「つくる」といった行為は、活気を生みだし、共同性や生業によってつくられる「方丈村」の未来のヴィジョンへとつながります。

[公募内容]

審査員

原広司(建築家)、西沢立衛(建築家)、北川フラム(大地の芸術祭 総合ディレクター)

採用数

30-40 点程度 (状況に応じて採用作品点数は増減します)

応募資格

大地の芸術祭の趣旨を理解している方 (参考資料記載)
提案内容により、期間中、一定期間の滞在が可能な方

規定・条件

応募点数:

応募者1組につき3プランまで

応募対象:

本展の趣旨、芸術祭の背景・道のを理解したうえで、提案されたもの。

また、次のいずれかに該当するものは募集対象外とします。

- ・雑誌等に発表されたもの
- ・コンペ等の応募作品 (公開、指名、入選、落選 不問)

会場:

越後妻有里山現代美術館「キナーレ」回廊

作品仕様:

組立式、移動式

奥行 2730 mm × 幅 2730 mm × 高さ 2730 mm以内

※素材等の条件は特にありませんが、芸術祭期間中、屋外展示に耐えうる作品としてください。

作品運営:

本展の趣旨を理解したうえでの作品空間を使った収益活動が可能です。

空間展示だけでなく、作品機能を実現するために、独自運営又は、他クリエイターとの共同運営が必要ですが、共同運営するパートナーがない場合は、アーティストやクリエイターを事務局より紹介します。

※会場での火気使用、飲食店営業(臨時)は、不可としますが、飲食店運営希望者は、会場施設内にある飲食店との連携を予定しています。

作品設置範囲:

原則、作品設置範囲(Aタイプ:5.0m×5.0m又はBタイプ:5.0m×4.0m)内に、作品を設置してください。

範囲内であれば、作品の向きは自由です。

※詳細は補足資料参照。回廊内の設置場所は、採用されたプランに応じて事務局が調整します。

設置環境に関する条件:

原則、原状回復をすること。

支持方法/会場床へのアンカー等による固定等は不可とします。

電気容量・給水設備/補足資料参照

排水設備/ナシ(水槽のように水を貯めることは可能ですが、常時、排水を行うことは不可とします。)

※「キナーレ」池部分には、他作品が設置されます。

※詳細な設置規定、各設備仕様については、採用されたプランに応じて事務局が提示・調整します。

搬出入方法:

会場作品設置場所まで、自力で運べる物、動かせる物としてください。

会場搬出入口サイズ/補足資料参照

※希望者には、現地組み立て場所を提供します。

※滞制作希望者は、作業場所、宿泊場所(一部、有料)等を事務局にて手配・調整します。

※詳細は採用決定後、事務局と連絡調整のうえ行います。

撤去について:

継続展示以外の作品については、撤去期間中に撤去をお願いします。

設置期間に関する条件:

原則 50 日間程度良好な状態が維持されること。

※ 閉会后、十日町市の中心市街地等に常設設置される場合もあります。

禁止事項:

次に掲げる行為をしてはなりません。ただし、事務局が認めた場合にこの限りではありません。

- ①銃砲、刀剣類、爆発性、発火性を有する危険な物品、有毒物質等の製造又は保管。
- ②暴力組織への加入、関係者の出入り、宗教団体への強制勧誘活動、違法な販売活動等
- ③排水管を腐食させ、又は詰まらせる恐れのある物質を流すこと。
- ④建物を破損すること、又はその恐れのある行為。
- ⑤大音量、高音を発してのテレビ・ラジオ・ステレオの操作、楽器演奏等。
- ⑥猛獣、毒蛇等明らかに近隣に迷惑を及ぼす恐れのある動物の飼育又は一時持ち込み。
- ⑦騒音、悪臭の発生その他環境、公衆衛生を害する行為。
- ⑧その他公序良俗に反する行為。

会場について

越後妻有里山現代美術館[キナーレ]

設計:原広司+アトリエ・ファイ建築研究所

竣工:2003年

この建物は、原広司の設計により「越後妻有交流館 キナーレ」として2003年に竣工されました。回廊部の中央には、池が配置されています。原広司は、施設自体が空間的魅力をもつこと、そして自らが集客力を生み出すという建築的特性をもつことを目指し、建築自体が自然を包括したものとして存在するよりほかにないと考え、自然のひとつとして「池」を選びました。

純粹幾何学形態である「正方形」は他の形態よりも圧倒的に美しく、この敷地において雑然とした街並みの中で景観の調整子としての役割を果たす。また、表現としてコンクリート打放し仕上げとガラスを多用し、「静かなたたずまい」を呈した様相は、外界から切り離された別世界を実現し、内部空間に配置された幾つかの室は、「建物の中の建物」となり、「入れ子」の構造になっている。これは日本の伝統として寺や神社の聖なる場所に見いだされる建築の造り方でもある。(「大地の芸術祭の里」HPより抜粋)。

2012年、同建築は原広司の手によってリニューアルされ、「越後妻有里山現代美術館[キナーレ]」として生まれ変わりました。1階はこの建物のシンボルといえるダイナミックな回廊と吹き抜け空間を活かし、楽市楽座やイベントを行う場所に、2階は常設展示の空間となりました。

(越後妻有里山現代美術館[キナーレ]HPより抜粋)

想定される作品展開例

小建築の空間では、多様な機能が想定されます。

全国の農家を応援する 鋤専門の鍛冶屋	再生可能エネルギー 妻有発電所	世界を映す アクアリウム
先生ひとり、生徒ひとり 小さな寺子屋	雪国の暮らしを知る 妻有アーカイブシアター	現代の「時」を告げる 仕掛け時計
描いて展示する アトリエ兼ギャラリー	毎日、新刊がでる出版社 兼ブックショップ	2018年の最小限住居
珍しい世界のお菓子を売る スイーツショップ	全国の旅芸人が集う 芝居小屋「妻有座」	雪室をつかった 保存野菜を売る食料品屋 & かあちゃんの手づくり おむすび屋さん

[応募方法]

応募方法

事前に出品料をお支払いのうえ、応募要項に定める提出物を送付してください。

応募用紙は「大地の芸術祭の里」の HP よりダウンロードしてください。

出品料

金額:1000 円(1 プランにつき)

日本在住の方:下記口座へお振込みください。(手数料は応募者負担)。

※振込人名と応募者が異なる場合は、応募用紙に必ず記載ください。

みずほ銀行祐天寺支店 普通 8072368 大地の芸術祭実行委員会

海外在住の方:WEB 上のカード決済をご利用いただきます。応募申し込み後、本芸術祭の東京事務局(株式会社アートフロントギャラリー)からメールにて案内をお送りいたします。

提出物

① 応募用紙:先頭ページに添付のこと。

作品名、応募者(グループ名、氏名、生年月日、性別、国籍等)、応募者代表の連絡先(郵便番号・住所、電話番号、FAX 番号、メールアドレス)を A4 判用紙に記載したもの。

② 提案書:

作品意図を説明するために必要と思われる図面やスケッチ、ドローイング、写真等、特に制約はなく、各自選択すること。表現方法は自由。

1 プランにつき、作品名、主要用途、主構造形式、主要仕上げ材料、サイズ、運営内容(100 字以内)、コンセプト又は設計主旨文(400 字以内)を A1 判用紙(841×420mm、横位置)1 枚にまとめたもの。

パネル化は不可。用紙に応募者氏名、グループ名は一切記入しないこと。

③ 出品料の領収書コピー:海外在住の方は、WEB 上のカード決済でプラン提出後支払

④上記①～②の電子データ(PDF、JPEG、MS Office (Word , PowerPoint)のいずれか)を記録した CD

※提出物は返却しません。言語は日本語又は英語のみとします。

説明会

大地の芸術祭 実行委員会事務局 東京事務局による説明会を行います。

・日時 2017 年 11 月 18 日(土) 17 時 00 分開始 18 時 00 分終了

・会場 渋谷ヒカリエ 3 階東デッキ 〒150-8510 東京都渋谷区渋谷 2-21-1

・参加費無料、予約不要

質疑応答

- ・質疑は、FAX・郵送・e-mail のいずれかの方法で事務局まで送付ください。
- ・皆さまからの質疑を整理し、まとめて大地の芸術祭公式ホームページで回答を公開します。
- ※ 電話などによる個別の質問には対応しませんので、ご了承ください。
- ※ 説明会での配布資料・質疑応答は大地の芸術祭公式 HP で公開します。
- ※ 使用言語は、日本語、英語のみとします。

提出先

〒948-0079 新潟県十日町市旭町 251 番地 17

十日町市総合観光案内所内 大地の芸術祭 実行委員会事務局「2018年の〈方丈記私記〉」係

提出期間

2017年12月20日(水)～12月25日(月) 17:00 必着 持ち込み不可

審査

- ・提出物による書類審査
- ・必要に応じて面接審査

審査発表:2018年1月15日に、大地の芸術祭公式ホームページに掲載予定です。

※審査結果に関するお問い合わせには一切応じられませんので、ご了承ください。

採用

- ・大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018「2018年の〈方丈記私記〉」への参加
- ・制作費補助(150万円を目安とした金額)

※最終的な予算は、提案書、採用決定後の見積の提出等を経て決定します。

※制作費補助は、搬出入費・交通費・宿泊費など、制作に必要なすべての費用が含まれます。

著作権等

- ・プランの著作権は応募者に帰属します。
- ・原則 採用作品の所有権は主催者に帰属します。
- ・芸術祭事業による活用や、滅却・廃棄については、主催者の判断とします。
- ・プランのドローイングや作品の写真は、大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018 のガイドブック、展覧会図録、パンフレット、記録集をはじめとする印刷物、大地の芸術祭公式 HP、プレス告知など、実行委員会が必要と判断した広報物に無償で使用させていただきます。

応募プランの扱い

提出物は返却しません。保存や廃棄に関する判断は主催者に委ねられます。

スケジュール

告知開始： 2017年10月16日(月)
説明会： 2017年11月18日(土)
質疑締切り： 2017年11月22日(水)
質疑回答予定： 2017年11月27日(月)
提出締め切り： 2017年12月20日(水)～12月25日(月)
審査発表予定： 2018年1月15日(月)
展覧会開催期間： 2018年7月29日(日)～9月17日(月・祝)

[その他]

最新情報

情報は、随時更新します。大地の芸術祭公式ホームページより、ご確認ください。

参考資料

過去6回の記録集、「美術は地域をひらく―大地の芸術祭10の思想」(北川フラム著 現代企画室)
「ひらく美術―地域と人間のつながりを取り戻す―」(北川フラム著 筑摩書房)
「方丈記私記」(堀田善衛著 筑摩書房)
「集落への旅」(原広司著 岩波書店)

会期以降の作品の扱い

作品の状態をみて数点を中心市街地のほか、越後妻有圏域に設置予定。

プレゼンテーション展の開催

芸術祭期間中に、出展作品のほか公募選外作品の一部を一堂に会し、展示を行います。

書籍・展覧会図録

芸術祭開催後に刊行予定。(出展作品、プレゼンテーション展の開催報告等)

[お問合せ・提出先・事務局]

〒948-0079 新潟県十日町市旭町 251 番地 17
十日町市総合観光案内所内 大地の芸術祭 実行委員会事務局「2018年の〈方丈記私記〉」担当
FAX 025-757-2285
e-mail info@echigo-tsumari.jp